

## タイ国ラヨンに技術移転された定置網の 漁期を通じた漁獲傾向の変化

○工藤尊世・有元貴文(海洋大)・

A.Boutson (Kasetsart 大学)・A.Munprasit・N.Manajit・T.Amorndiyakrit  
(SEAFDEC)・K.Phuttharaksa (EMDEC)

【目的】2003年に、タイ国ラヨンに日本式定置網の技術が移転されてすでに10年が経過し、タイ国内、そして東南アジア各地への定置網技術の普及がはじまっている。本研究においては、ラヨン定置網の漁獲特性を分析し、特に魚種別の日々の漁獲量の傾向をもとに大漁日を決定する条件、そして操業間隔を決定する要因について検討した。

【方法】2011年10月~2012年5月までの定置網の販売資料を解析に使用した。定置網はモンスーン期を除く6ヶ月間の間敷設され、操業は計78回行われた。漁獲量合計は25,395kgであり、総売上高は866,547Btであった。また、次の操業までの空き日数を操業間隔と定義し、海況と操業日の関係、並びに漁業者の兼業漁業種との関係を調べた。

【結果】漁獲量の傾向をもとに、10月23日~11月4日を初漁期。11月7日~2月14日を主漁期。2月17日~5月4日を終漁期と定義した。平均漁獲量は全体で326kg、初漁期225kg、主漁期402kg、終漁期213kgとなった。漁獲物の構成としては、Selar scads、Trevally、Gar fish、Barracudaで総漁獲量の71%を占め、この4種がラヨンの定置網の漁獲傾向に大きな影響を与えている。また、Selar scadsは11月~2月に特に多く漁獲され、漁期全体を通じて主たる漁獲物になっている。海況による操業日決定の傾向は見られず、漁獲量が低調になると操業間隔を長く取る傾向にあり、操業経費を抑えて各自の兼業漁業種に従事することで、各々の収入増を目指す体制が読み取れた。